

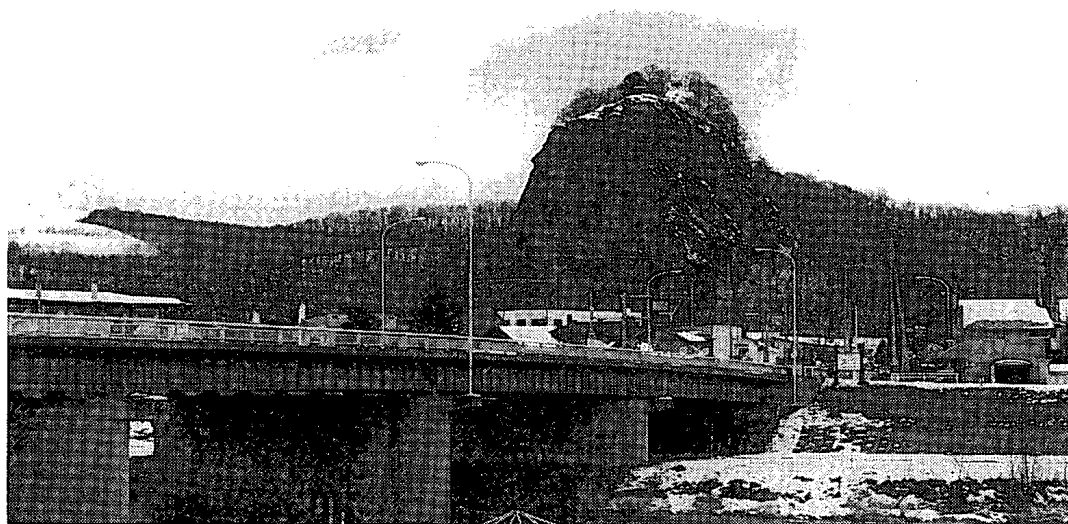
個人の生活史からみた遠軽町

宮 良 高 弘

年の瀬も押し迫った平成七年十二月二〇日、例年のように思い立って網走管内遠軽町の旅に出た。もう今回の調査の旅で、管内二六市町村の中で一四市町村を数えることになる。五〇年ぶりの大雪は、八七センチを越えるほどに積もった。いつもより早く自宅を出たのだが、大雪に行くてを阻まれ、札幌駅九時四〇分発のオホーツク三号にあわや乗り遅れるところであった。列車は予定通り出発し、雪原のなかを函館本線を北

上し、旭川からは石北本線となり山中を通り抜け一三時一七分にJR遠軽駅に到着した。前々から細川紀久夫農政林務課長に連絡し調査の趣旨を伝えてあったので、駅では笹原英視同課技師の出迎えを受けた。

早速、駅近くの三沢学氏のご自宅に伺った。同家で三沢さんは、小林誠氏と二人で私の到着を待ち受けておられた。先祖の出身地は三沢家が山形県で、小林家は新潟県であった。これまでの網走管内の調査は農家



遠軽町のシンボル巖望岩

が対象であったが、二人とも商家育ちであった。

近年の車社会の到来ともに、郊外への大型店の進出によって市街地の老舗は相次いで店を閉じ、商店街には空き店舗が目立ち、歯抜け状態になっていることを、二人はしきりに嘆いておられた。

次にお伺いしたのは、学田地区にお住まいの岸ハルエさんであった。ハルエさんは斜里から嫁にこられた方で、お子さんはそれぞれに巣立ち、ご主人を亡くされた後は一人暮らしであった。同家の先祖は、山形県の出身であった。

翌朝は、南町四丁目に大角平八郎氏を尋ねた。大角氏の先祖は、静岡県の出身であった。次いで尋ねた菅井清家には本人と、先代豊太郎の代に隣地に分家した先代の弟の武夫氏が待ちうけておられた。

菅井家は、三沢家と同じく明治三十一年に学田に移住し、同三八年には現住所の向遠軽に拠点を移した。原野を開墾しながら畑作や水田耕作を営み、今では酪農

業を手広く経営しておられる両家のその後の発展の様子を伺うことができた。当時から今日に至るまでの記録や写真が大切に保管され、向遠軽での生活の移り変わりの様子がよくわかり、有意義な調査の旅となった。

遠軽町の歴史

湧別原野の一角を占める遠軽町は、もともと湧別村に所属していた。明治三〇年四月一日、湧別村は紋別村外九カ村戸長役場から分離独立し、湧別村戸長役場が新たに設けられた。

明治四三年四月一日には、湧別原野基線六号線を境とし、それ以南を上湧別村とし、湧別村から分離した。二級町村制が施かれ、大正八年四月一日には遠軽村は上湧別村から分離し、戸数三三六七戸、人口一五五五四人を擁する村がいよいよ誕生した。

大正一四年には遠軽村から生田原村が更に分離独立した。昭和九年四月一日には一級町村制が施行され遠

軽町となった。戦後の昭和二年には白滝村（二一方里）と丸瀬布村（三三方里）が分離独立し、遠軽町（一四万里）は戸数二三七二戸、人口一三五九三人となった。

忠別（旭川）から網走まで五七里一四町一一間の北見新道、いわゆる中央道路（国道三九号線）は、明治二二年空知監獄の囚徒によつて着手され、同二四年には釧路分監の囚人も加わり、同年一月にはほぼ完成した。

これに続いて、翌二五年春から湧別浜市街を起点に、兵村を経て野上駅通で中央道路に連結する延長六里二〇町の基線道路が開通したが、遠軽町への和人の足跡は、野幌の北越植民社から転じた新潟県人角谷政衛が明治二五年一月に野上駅通取扱い人に指定されたことに始まっている。野上という地名はアイヌ語の「ヌツパ」の転化とされている。

角谷はその後明治三〇年に野上に土地の払い下げを



北海道遠軽家庭学校の礼拝堂

受けて農業経営に乗り出したが、明治二九年一月に仙台日本基督教会ならびに東北学院の創設者の一人である押川方義の信任を得て、当時札幌日本基督教会牧師であった信太寿之が企画立案した北海道同志教育会学田農場による開墾が遠軽町開拓の基礎を作った。

こうして遠軽町は切り開かれていったが、明治三二年頃には既墾地は二〇〇町歩に及び、石狩、日高方面から馬耕請負者を入れ農業事務所も、プラウ、ハローなどの洋式農具を購入使用し、積極的に耕作法を取り入れていった。

その後の展開の中で、学田地区に移住定着した人びとの出身県別は、昭和五五年現在で、山形県(四四戸)、新潟県(四戸)、福島県、大阪府、山口県、高知県(以上各二戸)、秋田県、山梨県(以上各一戸)であった。

菓子造り一筋に——三沢学氏の話



三澤 学氏

遠軽町の開拓は、明治三〇年北海道同志教育会学田農場の移住者によって開拓されたのが始まりです。それで、祖父の長之助と三男の恒助が農場監督の信太寿之さんと共に学田の地にキリスト教の大学を創るという理想をもって山形県から移住してきたのです。父広輔は翌年に来ています。

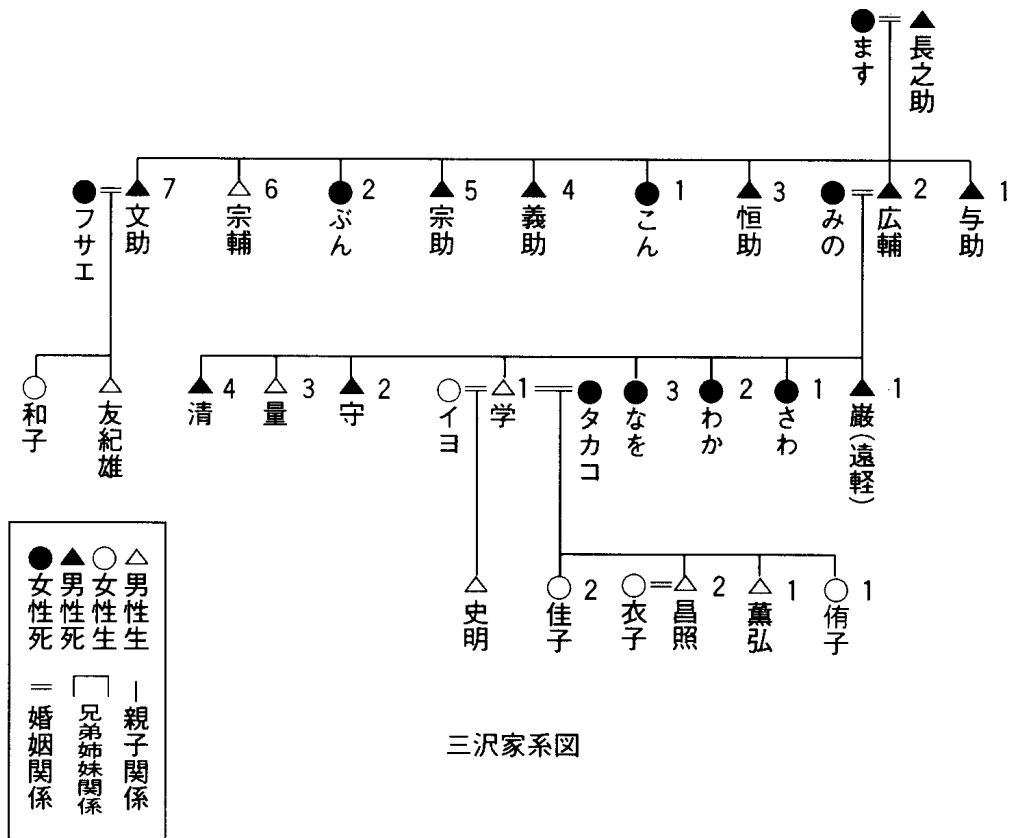
私は大正元年八月一日に、学田の開拓小屋で生まれ、現在八三歳です。父からみれば二代目です。祖父が明

治三〇年に来ているので、祖父からみれば三代目です。祖父は、三〇年に来て四〇年十一月二八日に亡くなっています。五五歳でした。

山形県南村山郡堀田村字成沢で、現在は山形市蔵王成沢です。祖母のますは、三三年に、最初は単身で来て翌年にみんなと一緒になったのです。子供は八人です。いちばん上から、与助、広輔、恒助、こん、義助、宗助、ぶん、一番下が文助です。これらが明治三三年に来たのです。

祖父の長之助が、ここの牧場の募集人になって、第一回目の移住者として三〇年に山形県のいろんなところから広く募集して信太さんと一緒に二〇人が移住して来たのです。第二回目には、合計で七〇戸くらいが入っているのです。

開拓当時の学田は、遠軽市街・学田・向遠軽・上遠軽を包含する地帯でした。学田の地名が残っているのは、駅前から北へ二キロくらい離れた所です。学田と

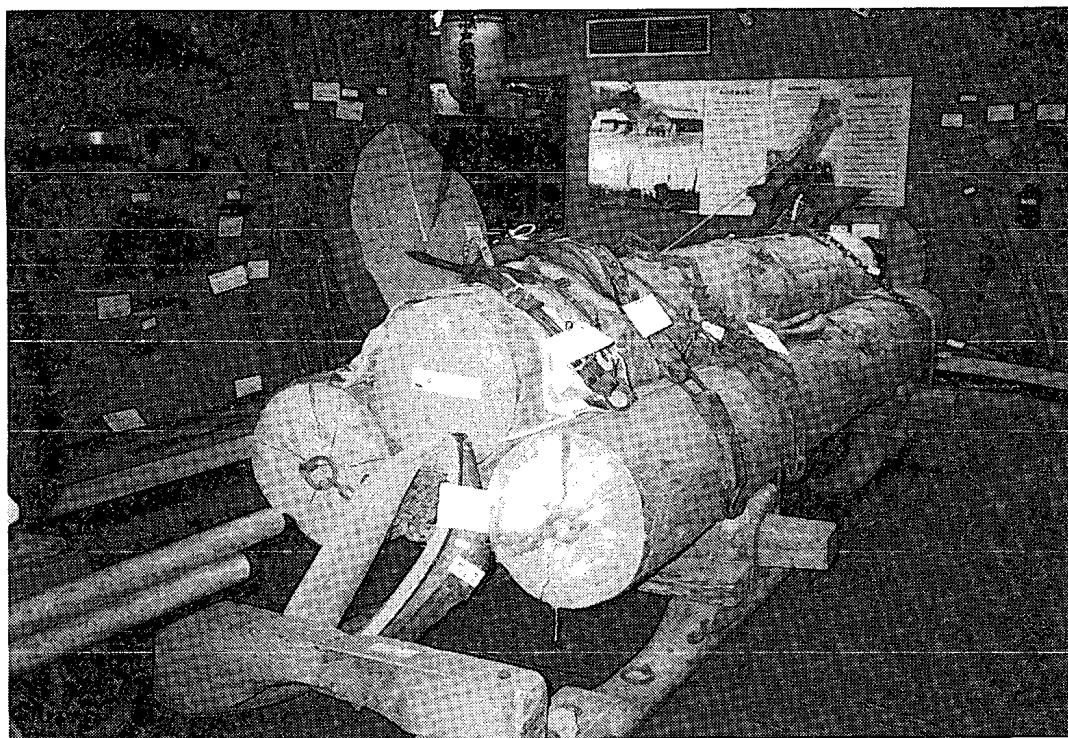


いう地名は、キリスト教の大学を創るということから付けられています。その理想郷を作ることによって学田と名づけたのでしよう。

その当時、家では、与助、広輔、恒助らは、妻帯しており、故郷から妻を連れて、全員が一つの開拓部落に共同で生活していたのです。家の造りは山形風の作りで、私の記憶にあるのは、枳苳きの大きな家でした。川の近くにあり、その当時としては一番良い家でありましたが、私らのおば達は結婚して別れて行きました。

当時は大家族での農業でしたが、隣に農業に欠かさない鍛冶屋がありました。原田豊次郎という人が山形から来て営んでおりました。鍬や鎌とかの刃物は全部手作りでした。その人もうちのおじいさんが山形から連れて来たのです。

ここに来た時は、西も東も分からなかったのです。大密林だったそうです。うちのばあさんと母親が、何でこんなところに苦勞して入らないといけないんだっ



バチバチというそりで丸太を運搬

てこぼしていたそうです。

平地には、ヤチダモ、アカダモ、カツラ、ナラなどの大木が密生していたそうです。開拓に入った翌年に大水害があり、少しばかりの作物も全滅し、大変な苦勞をしたそうです。このようなことがあって、あきらめて帰ろうかというようになって、開拓地を捨てて逃げ出した人もあったようです。

私の兄弟姉妹は八人ですが、私は戸籍の上では四男になっているのですが、間で二人亡くなって二男になっているのです。長男は山形で生まれてきてるのです。長男は巖ですが、すでに亡くなっています。その間の二人男が亡くなっているのです。それで四男なんです。巖はお母さんと一緒に来ているのです。この兄だけが山形生まれで、後は遠軽生まれです。兄と私の間に女が三人いました。長女はさわ、二女はわか、三女はなですが、全部亡くなっています。

私の下に、守と量、その下に清がいたのですが、今

生きいきしているのは、量と私だけなんです。さわは上湧別村中湧別に嫁いだのですが、亡くなりました。守は遠軽町向^{むかい}野上で亡くなっています。清は東京で亡くなりました。

開拓が終わったのは、かすかに覚えがあるのですが、その当時は広輔一家だけで、叔父・叔母は誰もいなかったから、一家で向野上という所に大正五年に移っています。そして父がそこらにどんな家が建つものから、木材を払い下げてもらって、父も兄貴も職人じゃないものですから、職人を雇って柵屋をはじめたのです。柵の原木は、とど松や赤松です。

遠軽という地名に漢字をはじめて用いたのは明治三四年二月に郵便局が設置された時でした。それ以来小学校や官公庁などでも遠軽という地名を用いていましたが、正式に決定したのは上湧別村役場時代の明治四四年五月以降であると言われています。

私は大正八年に瀬戸瀬尋常小学校に入り、向野上の

家から四キロの道のりを歩いて通いました。その小学校に三年間通い、四年の時に遠軽尋常小学校へ転校したのです。大正一〇年一二月に叔父の文助がお菓子屋を市街地で開業したのです。そこに、うちの祖母ますおばあさんがご飯炊きに行っていました。

小学校へ通うのに、一里もあるから大変だろうと言うことで、ここからなら小学校が近いから朝晩、店の掃除をしながら学校へ行きなさいと言うことで、そこから学校に通いました。おばあさんにいちばんかわいがられていたのです。おばあさんは内地の話をいろいろしてくれました。

ますおばあさんの話では、三沢家はもとと庄屋なもんだから、本家のすぐ隣に長之助が分家していましたが、長之助は農業を全然やったことがなかったのです。青年に学問を教えたり、寺小屋みたいなことをやりたりしていました。

それがたまたま仙台に出て、信太寿之という人に会

って、理想郷を北海道で作るといので、おまえらが行かないなら私が一人でも行くと行っていたのです。それで祖母からいろいろ聞いて、息子達も行ってみようということになって、ここに来たのです。

当時の服装はカスリの着物や縞の着物でなかったかなと思います。靴はぼっこ靴です。冬は毛布を巻いて学校へ通いました。中央通り（今の国道三三三号線）を、野上から角谷農場の方へ、そして国土庁の地図にも載っていますが三沢の沢から瀬戸瀬の小学校へ行ったのです。

道なんか開拓の道だから雨が降ったらどろどろになり、いつもは下駄で通っているのですが、ほとんど裸足でした。道が悪くてぬかるし、今の薬師山の下なんか運動会をやる六月にもまだ雪が残っていました。夏は馬車が通りぬかるため、その道には丸太を切って道路に敷いてあるのです。

冬は綿入れで、下着はメリヤスの上下、下は袴でし

た。初めて革靴を履いたのは大正一〇年頃でした。そのあとはゴム靴でした。あの当時は寒かったのです。足に毛布を巻いて靴を履いたから、学校へいくとストーブの周りには、つまごとかをみんなで乾かしました。それを帰りに履いて帰りました。遠軽尋常小学校では、このような風景はありませんでした。

食べ物、米は穫れませんでしたから米を少し混ぜてほとんど麦飯でした。米だけの飯は、盆か正月くらいでしょう。小学校に入ってからでも、当時秋になると、南瓜をお弁当にもつてきたり、とうきびや芋を弁当に持って来るのがいたのです。

木材やなんかをやっていたから、米、味噌、醤油は買っていました。母や姉達はみんな畑仕事でしたが、私はほとんど農家の手伝いはしませんでした。ただ遊んだ覚えしかありません。夏は小さな川があったから魚釣りもしました。魚なんかなんばでも釣れたものです。やまべとかでした。その他の魚は、ウグイ、カジ

カなどでした。

こっちの尋常小学校にきてからは町だから、農家のことは分かりません。まあ菓子屋になるつもりはなかったのに、結局菓子屋になってしまったのです。

文助とフサエにも昭和生まれの二人の子供がいました。長女の和子は嫁ぎ現在留辺蘂にいます。長男の友紀雄は遠軽にいます。両親が亡くなり現在はおやき屋をやっています。

父は私が小学校四年の時の大正十一年に亡くなってしまい、高等科は半分くらいしか行っていないのです。私は養子じゃないのですが、その間ずっと叔父のところにおいて、菓子屋を手伝っていたのです。

一六歳の時に野付牛（今の北見市）で、弟子入りをして本格的に菓子屋修行をしたのです。修行後の戦時中は二回召集になり、最初は三一歳の年でした。昭和一八年と二〇年です。そして根室で終戦になりました。その後は、文助叔父のところに戻ってきて手伝った

のですが、長男はだいぶ後に生まれ小さいから菓子屋を継がなかったのです。それで昭和一七年に叔父の家でタカコと結婚式を挙げました。

昭和一八年に長女の侑子、一九年には長男の薫弘、二二年には二男の昌照、二四年には二女の佳子が、それぞれ生まれました。

戦時中は統制でなんもできなかったから、遠軽町の陸上小運搬組合の統制組合で昭和一七年から二〇年一月まで勤めました。その年の一二月に菓子屋を独立開店しました。

当時は、大通南三丁目に開業し、私は平和くらい良いものはないと思って、平和堂と名付け開店したんです。その後二六年に駅前に移店し、子供に愛されるようにと願って、屋号をロバ菓子と改めました。

昭和三三年一月二九日に家内のタカコを亡くし、現在の家内イヨとは、昭和三四年九月に再婚したのです。これとの間に昭和四二年十二月二〇日に三男の史

明が生まれました。今は二男の昌照が菓子屋を継いで経営しています。

私の半生は菓子造り一筋です。始めた当初は、戦後間もなくですから原料がなく、粉とか砂糖とかを買うにも全部統制ですから、それをなんでやったかという、ビート蜜を農家で作っていたものを買ひ、澱粉が作られたので、それで麦芽を作って、澱粉餡^{あめ}を作ったのです。

そのうち、米軍の砂糖や小麦粉が配給になって、横流しになったものが菓子屋に入って来ました。それから本格的に菓子屋ができるようになったのです。まあ当時は菓子屋を生業としてやりたい一心でした。

「主人は北見で修行して来ていますから、もともとハイカラな菓子を覚えて来ているのですよ」と、奥さん。結局、洋菓子も和菓子もみんなやったのです。

少なくとも、自分の地元のもので銘菓を出したいということでした。いちばん最初は、すずらん最中でした。

た。その頃は、遠軽の学田のところが一面すずらん畑だったのです。そんな風景が子供心に頭にあったものでしたから、それを残したいなと思って、すずらん最中にしたのです。それにハッカ羊羹です。

最近では南瓜羊羹なんかも作ってます。まあ和生と洋生です。息子は東京の大学を出て、横浜の木村屋で新しいパンを習って遠軽に帰って来たのです。祖父から四代目、菓子屋として二代目です。

店は大通南一丁目と大通北六丁目にあるのですが、車社会になって駐車場のない大通りの一等地が一番不便になり、車で買ひ物が出来ないというお客さんからの要望もあり、息子は大通北六丁目に支店を出しました。

それに、新しいスーパー・シティーの中にも店を出しています。一番売れるのはシティーです。車で来て買ひ物が出来るということが一番なのでしょう。遠軽ではシティーと言いますが、ラッキーと同じです。

最近、遠軽の商店街の生協や大きいスーパーやコンビニの進出によって大きく変わりつつあります。私どもの店もお客様から愛される菓子のロバとして益々精進していきたいと思っています。

さまざまな職業を経て——小林誠氏の話

私は明治四十二年七月二日の生まれで、現在八九歳



小林 誠氏

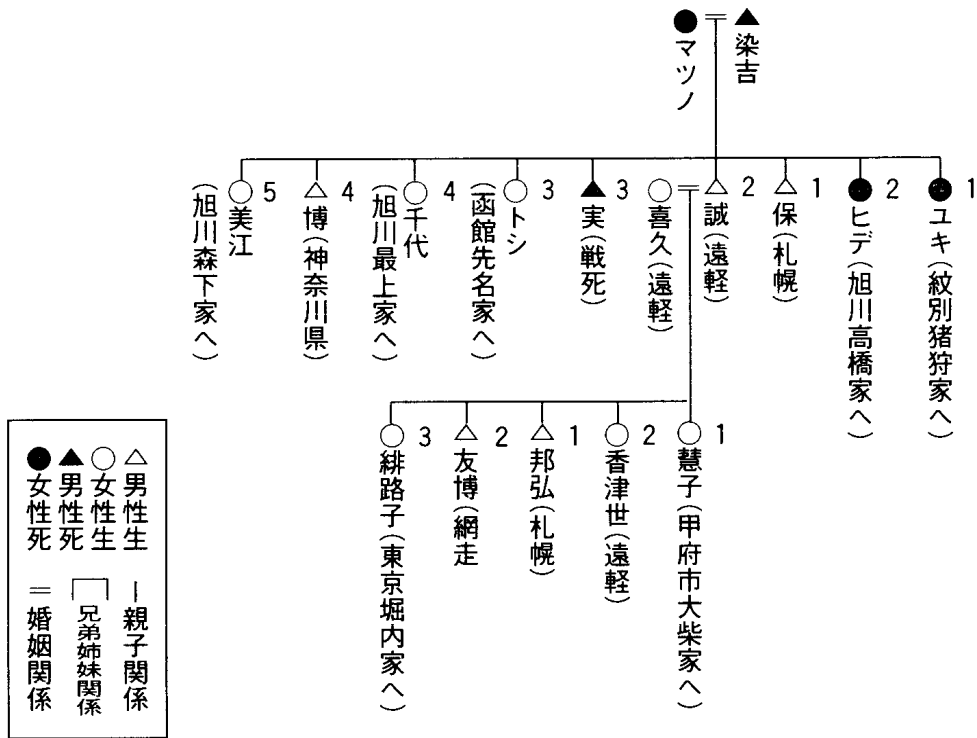
です。先祖は新潟県南魚沼郡六日町字余川です。私は遠軽生まれですが、父親の小林染吉が新潟から来たのです。

うちは開拓者じゃなく、単独移住なんです。最初に来たのは染吉と妻のマツノです。最初は親父一人が、明治三十九年に来たのです。湧別港に上陸したらしいです。

新潟港から船で、秋田を廻って、小樽港に上がったらしいです。小樽で乗り換えて、宗谷海峡を廻り、当初の目的は紋別港に上がるつもりだったらしいのです。ところが、時化のために船が小さいので流されて着けなかったのです。それで湧別の浜に着いたのです。

湧別ではなにも関係はないんですが、秋田から来ている佐藤さんの家にやっかいになったのです。それが偶然にも、遠軽町役場の民生部長佐藤一之さんの祖父に当たる方でした。何年か前に分かったのです。

目的が全然なかったので、それからどこへ入るか



小林家系図

いうことになって、いろいろ相談した結果、湧別村の芭露^{ばろ}に入ればということになり、それが遠軽に来たきっかけです。当時の湧別村字田遠軽市街というところ。うちは農業じゃなく、雑貨商を営んだのです。現在の大通り南三丁目です。もう壊してしまいました。が、木造平屋建ての桎^{かいわい}葺き屋根の家でした。

この界隈には商店が七軒くらいありました。宿屋、飲食店、雑貨店、菓子屋でもあるというように、商う内容が決まっているわけでもなかったのです。私の店の様子を申し上げますと、食料品から日本酒、焼酎、ビール、食用油、衣類、履き物、金物から燈の端までいろいろな雑貨がありました。

当時の商店はほとんど同じような形態で、なんでも屋という感じでした。農家の人が店先に立ち寄り、煮干しをつまんで焼酎を飲み、家へ帰る客もいました。今では思いもつかない風景でした。

少数のアイヌの人も近くに住んでいましたので、熊

の皮を持参してきて焼酎と交換してほしいと言って来ました。四合瓶三本くらいと畳二枚くらいの大きさの熊の皮の敷物と交換しました。

物価はあまりにも格差があり、現在の感覚ではピンときません。商品の仕入れは、もっぱら湧別港の湧別市街からのようでした。交通機関がないので、すべて馬轡か駄ぐらと称するもので、馬の両側に振り分けて運搬しました。

建物はすべて木造の桼葺きで、ランプ、ローソク、薪ストーブでしたから防火のうえでも大変危険でした。火災も多かったのです。屋根の上には防火用にトタンで作った天水樋をあげていたのです。酒樽の古いのも利用しました。

倉庫もみんな木造で桼葺きの屋根でした。シナの木が多く、まっすぐじゃないので、それを削って建てました。それに桼葺き屋根でした。

染吉とマツノの間には、五男四女の子供がいます。

長女のユキは紋別の猪狩家に嫁いだのですが、お産の後に亡くなったので、その後の家族の生活は分かりません。二女のヒデは旭川市に在住し、養老院暮らしをしていましたが、平成八年一〇月に九三歳で亡くなりました。長男の保は札幌在住です。

移住当初は雑貨商でしたが、その後呉服屋になったんだけど、はつきりした年月は分かりません。ずうつと商売をやってきて、昭和一四年には廃業しました。その理由は、統制が始まったからで、その後は旭川に住まいを移したのですが、私は遠軽に残りました。

兄貴は満州に行ったから、旭川に移ったのは両親と三女のトシ、四女の千代、五女の美江です。私の下に実という弟がいたのですが、戦死しています。軍人ではありませんが、広島から中支にいったつきり、音信がありません。裁判所で戸籍から消してもらいました。それからトシは函館に嫁いでおり、千代は旭川にいます。四男の博は神奈川県秦野市にいます。その下の

美江は旭川に引っ越しをする時に一緒にいったので、旭川市神居に嫁いでいます。

店を閉じて親たちが旭川へ引っ越した後は統制になって、タオル買えば何点とか、足袋を買えば何点とかいうように、衣料品関係は切符制となり、統制組合が、白滝、丸瀬布、生田原、遠軽、上湧別、湧別、佐呂間の七か町村にできたのです。その組合の名称は、遠軽地方繊維製品小売商業協同組合と言いました。

店をやめて私は組合に入りました。その後、昭和一年に海軍に召集になったのです。横須賀海兵団（隊？）に入隊してそれで帰ってきたら、その組合は清算組合になっていたんです。もう関係者はみんな亡くなってしまうって、当時の状況を知っている者は、一人くらいになっていたのです。清算も完了していなかったのです。

それで私は別の仕事についたのですが、その間にいろんな小さい仕事をしましたが、北見バスに昭和三〇

年に就職しました。その後、昭和四二年に定年でやめて、第一火災保険の代理店をまだ現役でやっています。

家族は、妻の喜久は大正七年の生まれで、現在も健在です。長女の慧子は昭和一二年の生まれで、山梨県甲府市の大柴家へ嫁いでいます。それに香津世は昭和一五年の生まれで、遠軽に嫁いでいます。次が長男の邦弘で札幌の不動産会社に勤めています。その次が友博で、網走にいます。その次が緋路子で、昭和二一生まれで東京の堀内家に嫁いでいます。跡取りは、長男の邦弘です。

まあ父親は、商売をやるということよりも公職に力を入れていました。消防団とか、部落会長とかです。当時北海道では、消防の組頭会議というのがあって、遠軽の消防組頭はすごかったのです。ここの消防の始まりは、内地からきた時に私設消防を作っていたのです。なんにもない時代でした。

当時、佐竹工場には、相当進歩していたのかどうか



昭和初期の消防団員

は知りませんが、ドイツ製品のポンプがありました。それを借りて来て消火作業をしていました。父は消防の記録を丹念に手帳に細かく記録していました。それを遠軽消防署に渡したのですが、なくしてしまったのかも知りません。

初代の消防です。当時の消防は、現在とは違いました。消防は警察署の管轄でした。昔は組頭の時代で、人力で消すしかなかったのです。長トビとか、冬期間の火災にはスコップで雪をかけたりしました。親父が生きている時にはやりませんでした。私も消防を二年間やりました。

商業の発展がこれでストップしたというのは、大変なことです。政治問題ですね。大型店舗の規制解除をやったでしょう。すると都市では大型店舗が満杯になっています。どこへ延びるかという、地方なんです。だからこんな小さな町でも大型店舗が出来てしまつて、町の小さな小売りの店舗は成り立たないのです。

だからシャッターを下ろしてしまつて、空き家、空き地だらけでなのです。そうすると、町づくりをしようとしてもなかなかできないのです。

これは全国的にいえることですが、田舎の過疎化はますます大きくなって行くのです。仕入れも違いますから、一次卸から買うのと、二次卸から買うのとでは大きな違いがあります。大型店は大量仕入れですし、資金力も違います。値段も違うし、品ぞろえも違います。上の親方はなんにも考えていないんだらうね。それに一方では生活協同組合というのが大きくなって、普通の大型店舗と同じことをやっているのです。

牛とともに歩んだ半生——岸ハルエさんの話

岸家の先祖は現在の山形県東村山郡大曾根村大字上反田です。主人の父源太郎の兄仲治が最初に来ています。仲治の妻はれんといいますが、二人の間には子供

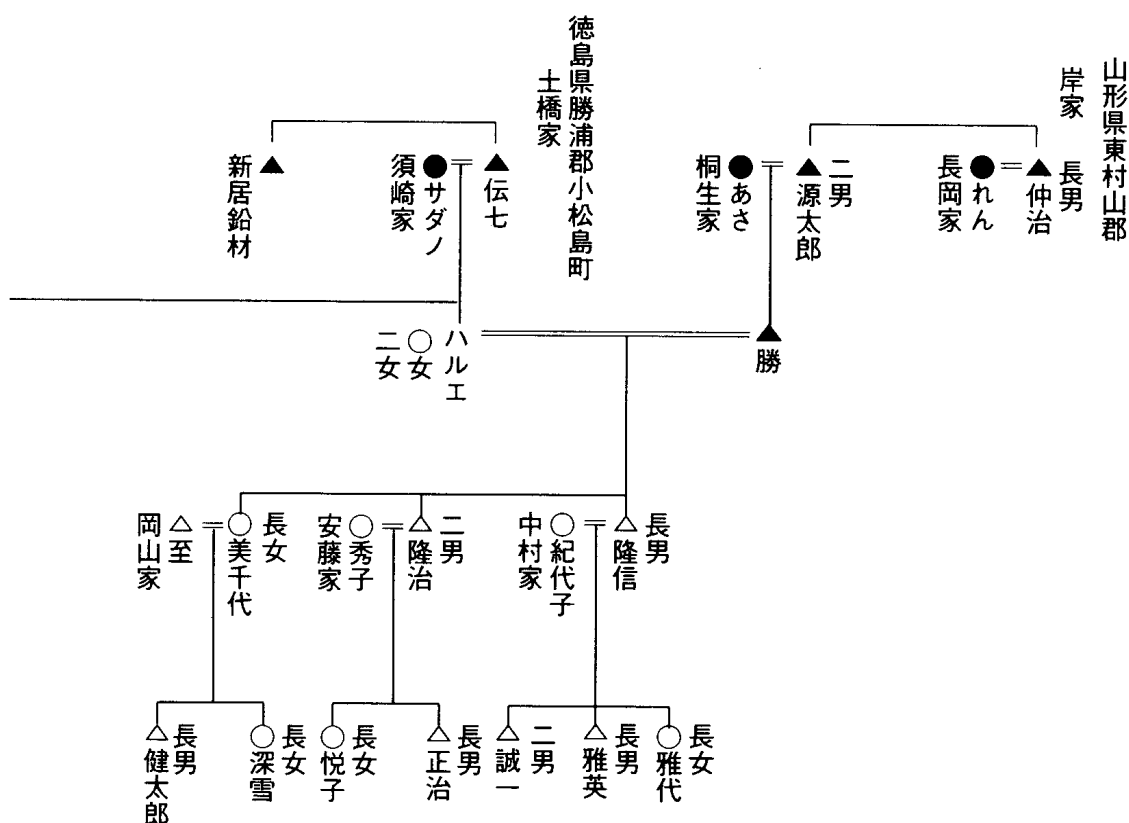
はいなかったのです。それで兄弟だけど、弟の源太郎を養子にしたのです。

源太郎の妻はあさと言いましたが、その間にたくさんの子供がいます。私の夫の勝はその長男でしたが、もう亡くなりました。私は、大正六年三月二五日生まれのハルエです。後で話すように、私はひよんな縁で斜里から岸家に嫁いできました。

私の父親は土橋伝七で、母親はサダノですが、大正



岸 ハルエさん



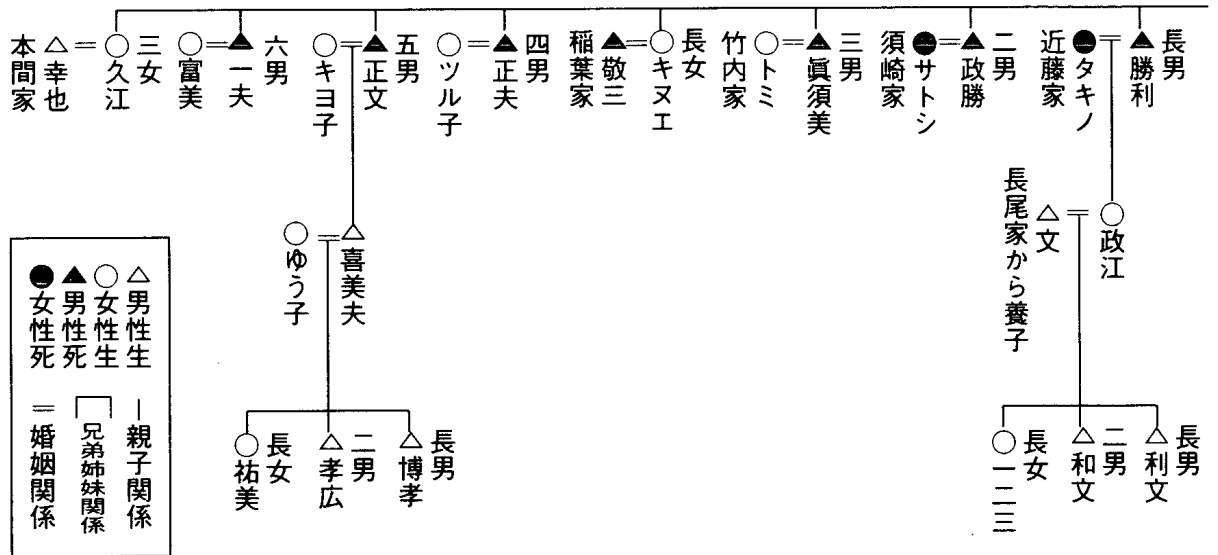
岸家系図

五年に徳島県勝浦郡小松島町から斜里に移住しました。斜里に父親の姉の新居が先に移住し、鉛筆の材料にするオンコの木の鉛材工場えんざいをやっていたのです。

その頃、汽車はありませんでしたから、馬車で鉛材を網走まで運んでいたのです。父親は斜里の三井農林の土地を借りて鉛材工場を始めましたが、その時私は七歳でした。それが火事になって工場をなくしたのです。それで三井農林の小作人になったのです。

父親は、三井農林の農場で小作をやりながら、傍らで六人くらいの人を雇って、ジャガイモを作り澱粉工場をやったり、牛も飼っていたのです。最初は赤いエアーシャー種という牛を飼っていましたが、羊も飼うようになり、自給自足の生活をしていました。

三井農林は今はいなくなりましたが、当時斜里には三井農林があり、トラクターなどの農業機械がありましたから、斜里の方がこちらより開けていました。みんな小作でしたが、戦後に農地が解放され自作農に



なったのです。それで私のやっていた所は、私の弟の正文がやっています。その長男の喜美夫が、今では跡取りをしてやっています。

土橋工業木材株式会社というのが豊倉にあり、私の一番上の兄勝利の経営でした。この兄が若い時から弟たちと一緒に木材をやっていました。勝利には女の子が一人しかいないので、今は婿をもらって跡を継ぎ、その長男の利文が専務をしているのです。

私の父親は当時の斜里村の村議になり、その後には道議になりました。それで私に酪農業をまかせるようになりました。昭和十一年には、牛乳の一升の価格が一五銭でした。一年間に二四石の乳を絞って、これはよく乳の出る牛でしたが、それでも一頭当たり年間四〇〇円くらいにしかならなかったのです。

ホルスタインの登録をして搾乳していましたが、そのうちに牝牛が生まれたのです。それを種牝牛にしようということ、昭和十一年八月に、管内の第一回共

進会が野付牛（昭和一七年市制施行により北見市）であつたのです。

その時に私が牛を連れて参加しました。そこで、たまたま主人と会い、札幌からきていた検定委員の桜井さんに中に入ってもらい、縁がまとまって昭和一二年一二月二四日に結婚しました。ちなみに、その牡牛は、小清水町に買っていただき、当時の鉄道貨車で私が付き添って連れて行って引き渡しました。

前にも話しましたが、私の先祖の地は四国の徳島県勝浦郡小松島町で、親が故郷から斜里に移住した斜里の生まれの二女ですから、私の結婚は四国衆と山形衆の恋愛婚でした。結婚して遠軽に来てみますと、ここはまだ半分くらい原始林でランプ生活でした。

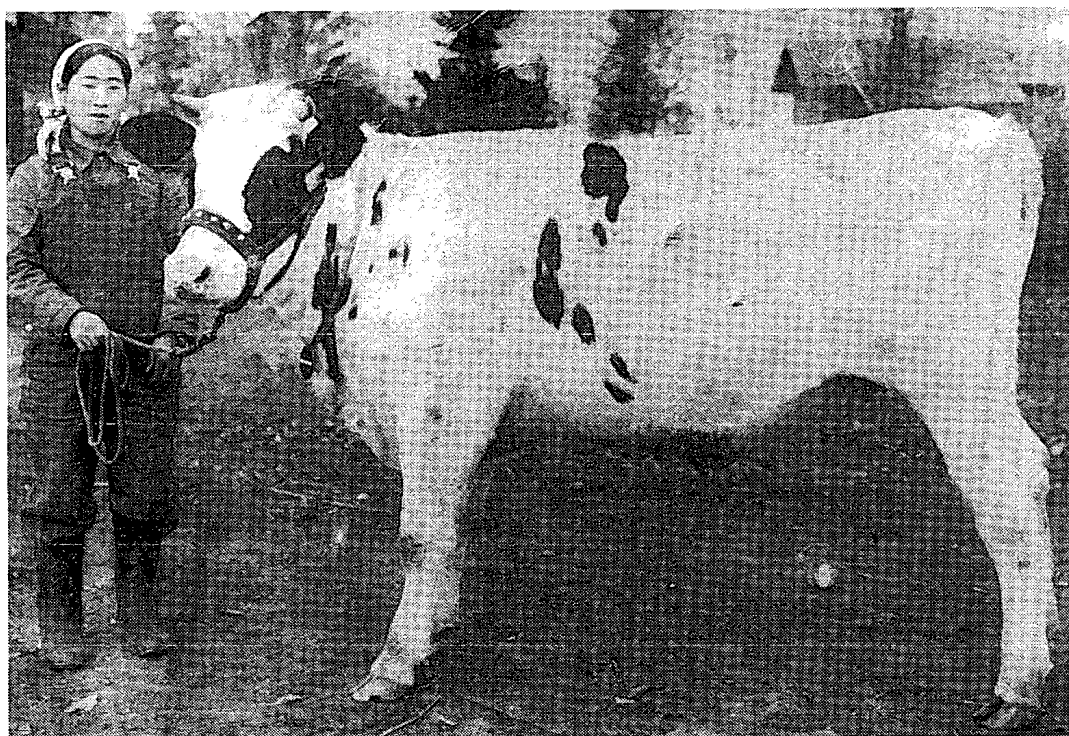
遠軽では、冬の間に険しい山へ薪切りに行き、山から薪を出してバチバチ馬共々に命をかけておろしてくるのです。そして鋸で切って割る手がアカギレになっていました。どちらかというと活発で、きかない性格

の私でしたが、泣いたこともありました。その時、私は二三歳くらいでしたが、岸家の兄弟は昭和八年にすでに南米ブラジルに移住していました。当時は兄妹でも上は、農家をしていませんでした。

そして、主人は翌年一三年一月一〇日に、旭川の師団に入隊したのです。だから結婚して何日も一緒にいなかったのです。一年くらい旭川にいて、戦争が始まって三年くらい北支に居まして帰って来たのです。その後、二回も応集されました。

その間、私が留守を守っていたのです。ここには、仲治のれんおばあさんがいたのです。母親のあさは昭和八年にすでに亡くなっていましたから、主人が帰って来るまで私はれんおばあさんと二人で生活していたのです。

私が嫁に来る前に、遠軽町では岩手県の小岩井農場から買った乳牛が三頭いました。それは遠軽町の基礎牛として入れたのです。野口正さん、篠原音松さん、



昭和14年、岸ハルエ21才 この牛は管内家畜共進会で最高位賞を獲得

岸が、それぞれ一頭ずつ入れたのです。家の牛が一番高くて、当時で八〇〇円もしたのです。

一頭八〇〇円の乳牛は、当時としては高い乳牛でしたが、最高点の牛でした。主人が兵隊に行く前の昭和一一年頃ですから、私が来てからも年賦償還で、その代金を支払っていました。そして、牛を徐々に増やしてきました。その頃の乳価は一升一五銭で、一頭当たり四〇〇円の収入でした。

ここから元の役場前まで、一時間以上かけて牛を連れ高等登録体格検査を受けに行きましたが、管内で最高の八二点をとりました。その頃、戦争が激しくなり、男手はほとんどなく、ほとんど女手でした。

主人は兵隊にいていましたが、その頃はハッカも作ってました。複合経営をしていたのです。遠軽の学田には、灌漑溝があつて、その下に水田があつたのです。灌漑溝に通じる細い道が一本しかなく、歩くと遠軽の市街地まで近道です。あの頃は雪印だったので、

牛乳は馬車に積んで工場まで運びました。のちに森永乳業に変わりました。

れんおばあさんの話では、ここに移ってきた頃は、うっそうとした原始林が繁茂し、太陽は全然見えなかったそうです。木は檜や柏が中心でした。今は木は一本も生えていませんが、切り倒した木はどこへも運べないから、高く積んで燃やしたという話をしてました。

私は、昭和一六年三月に札幌の苗穂に冬期酪農学校というのがありまして、そこに一週間ばかり野幌酪農義塾の研修生として参加しました。酪農学園大学を作った黒沢西蔵先生が塾長をしておられました。そこには娘さんばかりが来ていましたが、私は結婚してました。友達もできました。

昭和一八年頃、黒沢先生から教わった「農業は土造りから」という言葉に従って土壌を改良することになりました。暗渠排水の工事を始めたのです。若い部落の女性にお願いして始めた工事は土が凍っていて大変な

ものでした。三尺（一尺は約三〇センチ）ごとに柳の木を束ね、土管の変わりに使用しました。こうして五町歩を仕上げたのです。

その頃は、食べ物が無い時代で、強権が発動されました。警察が来て、こんな米があるのだから供出せよと言われて、ほんの少しを残して供出しました。その頃は女ばかりで、俵を編んで一俵一六貫（六〇キログラム）を俵に詰め、男手が不足していたため女性が荷造りをして馬で出荷しました。

農業機械ありませんでしたから、水田を農耕馬一頭で女手一つでは二町歩を耕作できなかったのです、一町歩は小作人に貸していました。当時のわが家の耕地は広く、全部で二五町歩もありました。戦後の農地解放で貸していた分は小作人の土地になってしまいました。

仲治が明治三十一年に移住した時に、二五町歩の土地を拓銀からお金を借りて買ってあったのです。そのお

金を三〇年間の年賦で償還しながら、みんな自分で開墾したのです。私が嫁に来た後も、拓銀に払っていましたが、あとで一括返還しました。

誰も入っていない土地でしたから、開墾に大変苦労しました。前にも話したように南米へ移住した人がいましたから、この人たちにも土地を分けてあったのです。ここはばあさんの土地、ここは親父さんの土地とかいって分けてあったのです。人手不足のため小作人を入れてあった土地は、戦後の農地改革で小作人の土地になったのです。その時に、わが家の土地は殆どなくなりました。

残ったのは、ここにある一戸半分の七町五反（七・五ヘクタール）です。主人が戦争から帰って来て、大分たってから牛を増やさないとけないということになり、戦後の昭和三〇年頃に専業酪農家になりました。

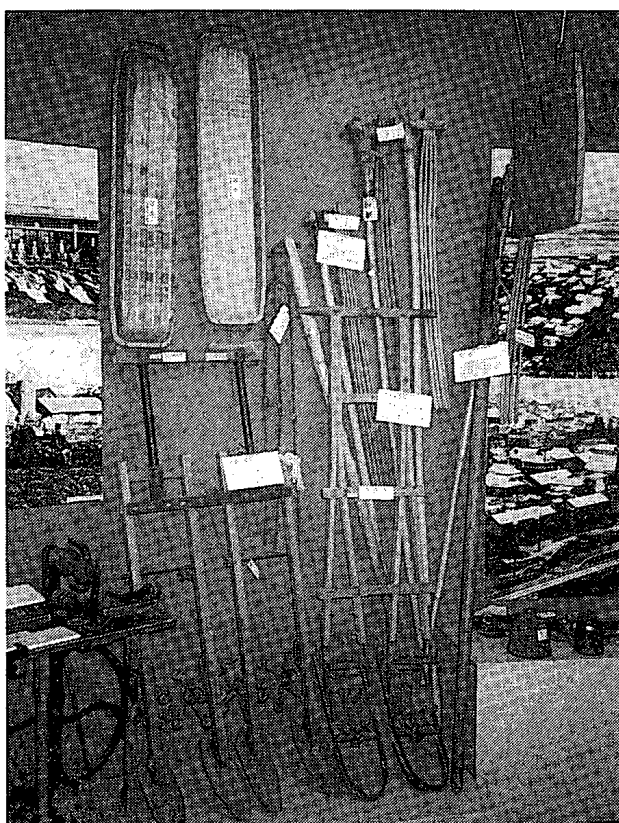
岸家は明治三〇年に移住して、大正四年まで現在の大通七丁目に住んでいましたが、たびたびの大雨で農

作物の収穫が皆無になったため、現在のところに移りました。

その当時建てた家は、昭和四一年まで入っていましたが、その材木は生田原から流送で運んだと聞いています。同じく建てたハッカ乾燥小屋は、今も残っています。私が来た当時に、ハッカを縄で編んで吊し、乾燥させたことを思い出します。

子供は二男一女です。昭和一七年三月に長男の隆信を、一八年七月には二男の隆治を、二二年二月に長女の美千代を出産しました。その頃は、お金があっても衣料品は買えませんでした。自分が嫁入りしたときの着物をほどこ、再生して三人の子供を育てたのです。食料はわが家で造り食べさせました。牛乳や卵などを売って、金に換え生活を支えました。

主人は昭和六三年に亡くなりましたが、昭和六〇年頃に土地は全部貸しました。息子二人と娘は三人とも独立しています。みんな遠軽の学校を出て、長男の隆



水田で使用した農機具

信は旭川にいますが、二男の隆治は、北海道ナショナル情報特機の請負をしています。最後の美千代は東京の中央大学を出て、今は埼玉県所沢市に住んでいます。孫は全部で七人もいます。

私が結婚した当時は、おばあさんと二人でしたから、留守番にきたみたいなものでした。その間に検定牛の

種牡牛を二頭だしたのです。その内の一頭は、農林省の買い上げで、当時の値段で一頭で千円です。もう一頭は道庁の買い上げで、一頭八〇〇円で売りました。戦時中の主人のいない時でした。

電灯がついたのは、戦後五年くらい経ってからです。子供たちが帰ってきて、農業をしないものですから、今は土地を全部小作に貸してあるのです。今の農業には関心がないのです。

ここに嫁いで来た時に、食べ物があったんですが、だんだん厳しくなってきました。その頃も田圃を何反か作ってましたが、終戦の昭和二〇年は大冷害で、一粒も実らずなにも穫れなかった年でした。昭和二一年に、早生種を作ったのです。早く穫れる米でした。九月の始めに脱穀して白米にして食べました。

この辺は九月の始めにお米を収穫して食べましたが、後にも先にもこのような年はないのです。あの頃は、とても米とかは買えなかった時で、衣類は点数制でし

た。私たちの年輩の人が、みんな味わった苦しい体験です。つくづく農業をして良かったと思いました。

実家にいたときは、たまたま牛が好きでしたから苦しい体験はしなかったのです。いちばん上の兄が鉛材工場をやっていましたから、白米も食べましたし、物も買えましたので、なんにも困らなかったのです。

こっちに来てから、土地は二五町歩くらいありましたが、さつき話たように作物が穫れなかったら、小作料は払って貰えなかったのです。小作料が入らなくても、所得税をとられたのです。

私とおばあさん二人なのに、つらい生活でした。昭和二〇年の年が一番つらかったのです。食べる物がなにもなかったのですが、みんな味わったことじゃないですか。私たちは小麦を食べられましたからまだいい方でした。

当時は澱粉粕とか笹の実を採って、粉にして食べていた人がいました。大東亜戦争も激しくなり、増産へ

増産へと追い立てられ、男性はほとんどいない状況でした。

今は、子供が家を出てしまって、後継者がいない家が沢山あります。わが家でも、やむを得ず離農をしましたが、農業を続けているのは少なくなりました。

学田地区は、ほとんどが山形県人です。学田は遠軽の発祥地です。現在は、厚生病院からこっちが全部学田ですが、学田の戸数は随分あります。学田地区全体で、一二地区に分かれています。北学田だけでも一〇戸くらいあります。

現在の構成員は山形県出身者とは限りません。最初はキリスト教の大学を創るということでしたから、神社はありません。遠軽神社は遠軽町の招魂祭を行う町全体の神社です。寺もありません。

今ではかならずしもクリスチャンが多いというわけでもありません。多いのは日本キリスト教会の信者です。日本キリスト教会と、カトリックと救世軍とがあ



現在の遠軽神社

るのです。

現在、学田は、北学田と、学田第一、学田第二の三地区に別れているのです。北中央は町に隣接し、戸数は一番多いのですが、今では農業をしている人はほとんどいません。第二はここよりあまり戸数は多くないのです。

戦後の昭和三十一年には、封建制を打破し、農家の生活改善を図る目的で、農協婦人部が発足しました。パン焼き釜を作りパン焼きをしたこと、綿羊の肉でジンギスカンを作ったことなどが懐かしく思い出されます。この婦人部に所属し、部長を約一八年くらいやりました。

発足当時の昭和三十一年八月の部員数は、約六〇〇人（現在八〇人）で、各地区組織ができて、農業を盛り上げて生活しようという気持ちがあつて、その時は本当にうれしかったです。綿羊の毛を農協に出荷し、豆なども集めて俵に詰め、農協を盛り上げたこと、また

綿羊の毛を糸にして、セーター、手袋、靴下など子供たちのものを夜なべして編み物をした思い出などが数多くあります。

今年で四一年目になりますが、今も続いていて花造りや運動会などをしています。自家用のトマトジュースも作っています。よかったと思います。こうして思いを深めていくと、苦しかったこと楽しかったことなどがいろいろと走馬燈のように思い出されますが、八一歳になった今、思いの滝を纏めて語ることの難しさを感じじみと噛みしめているのです。

林業に勤しんで——大角平八郎氏の話

名前は^{おおすみ}大角平八郎です。生まれは大正一三年八月二日です。もう七一歳です。先祖は、静岡県掛川市西郷村字三戸ヶ谷です。

父親の大角平太郎が妻リウと姉のヤエを連れて移住

したのです。もう三人とも亡くなりました。太田家へ嫁に行った二番目の姉のシズエは北海道に来て、明治四五年に湧別郡下湧別村字志^{しぶし}撫子で生まれています。

湧網線は今はないのですが、芭^ば露^ろ駅と計^け呂^ろ地^ち駅との間のサロマ湖の近くに小さい沢があるのです。そこに静岡から一二、三軒の開拓団が入地したのです。

移住するには、北の方から廻って来たというから、函館、札幌、そして帯広線で、帯広から置戸、留^{るべし}辺^べ藁^{わら}を通って、志撫子に来たのか、山越えの馬で来たのか、池田回りで来たのかの三通りのうちどちらかです。いずれにしても明治四一年頃の移住です。

他の家族は五人とか六人とかいたのでしょうか、ほとんど若い人が静岡団体で一二、三軒で来て、サロマ湖の近くの漁師の家を借りていたということです。うちの家族は、そこから一里半（六キロ）くらい奥に開拓に入っただけです。



大角平八郎氏

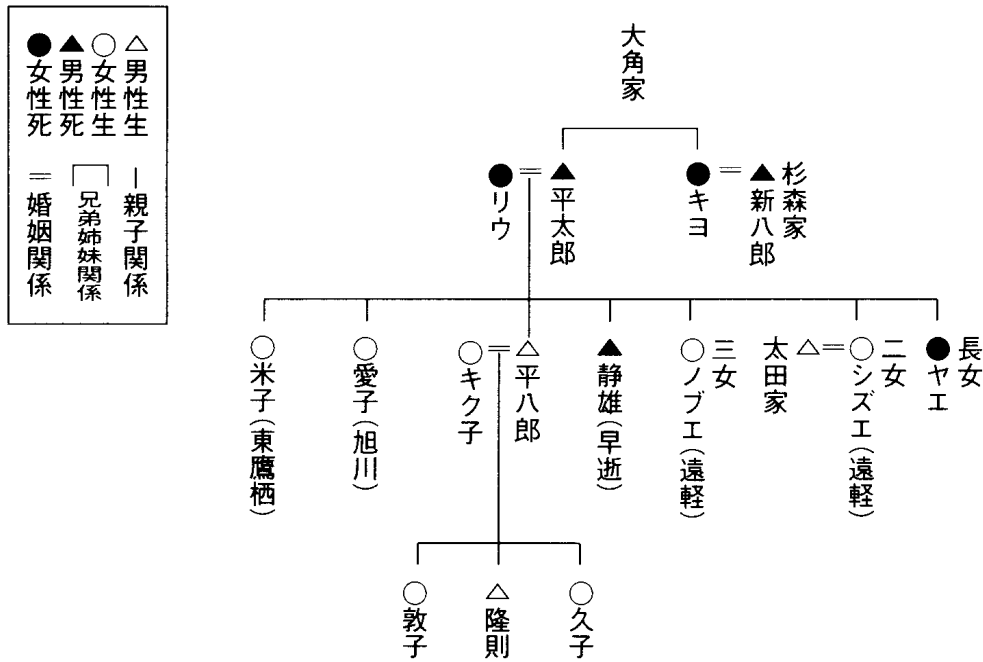
道路がなくて、サロマ湖の水の上を入地したと聞いております。馬櫓で送ってもらったのですが、静岡から来ましたので、北海道は寒いのに困ったということでした。だから稼ぐといっても仕事もなく、志撫子で漁師をやっている人から魚をもらって食べたり、何か仕事をさせてもらって、その人達に助けられて、開拓に入っただけそうです。

その頃はなにも食べるものがないから、山に行って

山百合を掘って食べたらしいのです。男の人はなにかにか仕事をしたのでしょうか、女の人はその山百合とか路をとったりしました。路のとうがでるのをまっけて、採って食べたりしたそうです。とにかく、最初は食べ物に苦労したということです。

なぜ静岡からこちらに来たかという点、内地で分家しても土地がないから土地をもらうのが理由のようです。今から一〇年か一五年前頃に、うちの父親をよく知っている人に会ったことがあるのです。うちの親父平太郎も死んでしまっていたのですが、その人もいいかげんな年の人でしたが、うちの親父よりは若い人でした。

その人は、内地の大角本家の隣におった人でした。私の名が父親の名前に似て平八郎というもんだから、平太郎の息子かと聞くのです。俺は平太郎の息子だと答えると、その人が言うには、そのじいさんの親うちの親父が友達だったということです。



大角家系図

それでうちの親父のこともよく知っていました。北海道から一回か二回故郷に帰ったときに、その人が聞いた話では、内地で分家をして土地がないから北海道へ行ったということです。

平太郎は二番目に間違いないです。姉がいたし、その姉も北海道に来ていました。杉森というところに嫁に行きました。その姉は団体と一緒に来ているのです。その姉の名前は杉森キヨといいます。

私の兄弟姉妹は、長女はヤエです。二女がシズエ、三女がノブエ、その下に生まれてすぐに亡くなった静雄という兄貴がいたのです。その静雄の下が私、平八郎です。私は志撫子で生まれました。一四歳で遠軽に来たのです。それからずっと遠軽にいます。

来た当時は、遠軽市街に二年くらいいました。湧別川からこっちは当時は向遠軽とっていました。その後には字名が、遠軽町南町一丁目、二丁目、三丁目と変わり、ここは四丁目になったのです。

遠軽に一四歳で来たというのは、私の生まれが大正一三年ですから、昭和一二年に再移住したことになります。私の下には、妹が二人いて、自分より二つずつ違うんです。四女の愛子は旭川です。五女が米子で、子供らはみんな勤めにいってますが、米子は東鷹栖で米を作ってます。

遠軽に再移住したのは、志撫子では、小麦、大麦、芋、南瓜くらいしか穫れなかったからです。遠軽でも今は水田は少なくなりましたが、当時の遠軽は一面が水田の大地でした。それで遠軽に來れば米が作れて、米を食べれるというので、志撫子から遠軽にきたのです。

その当時は、誰でも青年学校に入ったのです。青年学校は今の駅前の十文字のところの信号のところに建っていました。今の自衛隊がきちんとしてるように、青年学校は兵隊のまねをしていました。

私は一九歳の時に、青年学校から選ばれて駅伝に出ました。当時の駅伝競争は、白滝の奥から石北線を通っ

て、瀬戸瀬の人は丸瀬布から瀬戸瀬までというように走ったのです。

消防とか、在郷軍人とか一〇何チームが一緒になって競ったのです。私は瀬戸瀬から遠軽まで走りました。これは大通りから今の遠軽駅の方に向かって、中通りを越して岩見通りにさしかかる途中の決勝点付近を走っている写真です。今の国道はもう少し後ろの方です。

その当時は自分の作ったものしか食べれないような時代でした。家がなくて、市街に二年くらい借家住まいしました。昔、森永乳業という会社は佐呂間町に移転しましたが、森永乳業の前は、興農公社とっていましたが、それが森永乳業にかわりました。牛の乳の工場へ初めて働きに行きました。労賃が一日八〇銭で、牛乳の輸送缶を洗う仕事でした。それも六カ月か七カ月でした。秋から春雪解けまででした。

遠軽に來た当時、遠軽では一カ所だけ土木建築を請け負う南出組があったのです。そこに私は働きに行き



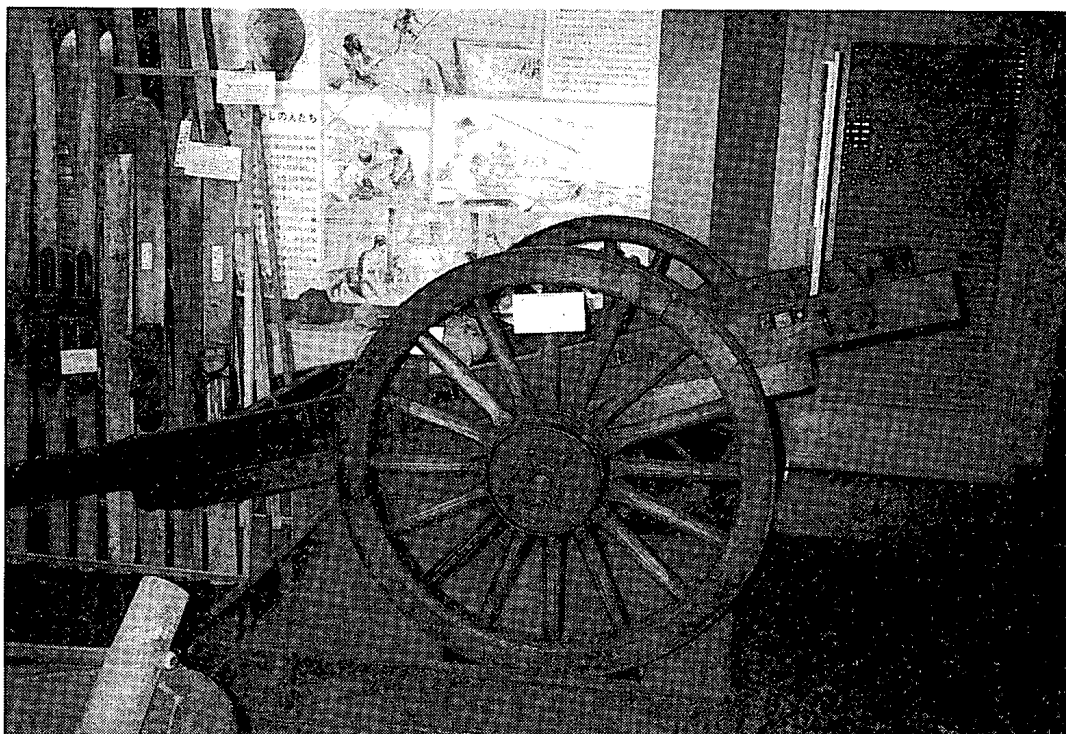
駅伝大会の決勝点附近

ました。労賃が一日一円五〇銭くらいでしたから、工場に行っていた時よりも倍近くの労賃を得たのです。コンクリート工場もやっていました。

南出さんのあとが渡辺組です。南出さんの所を渡辺組が買ったのです。南出秀一さんという人がやっています、そこで兵隊検査が終わるまで働いていました。工場に行っていた時の一日八〇銭が一日一円五〇銭となり、よく働くからといって一円八〇銭もらったりしました。

一九歳の時に、南出さんのところで手を怪我したのです。それで、大事にしてもらいました。私は学校がきらいで、読み書きが駄目でした。人は生活が悪くなればいろいろと考えるもので、儲けないといけないから、人なら一日一人分の賃金しか稼げないんだけど、馬だったら一日三人分から五人分ぐらい稼げました。

そこで、昭和一九年から山へ馬轡に丸太を乗せて引かせる玉引きに行きました。当時で一日五円稼げまし



復元された馬車

た。その頃、大人一人のデメン賃は二円から二円五〇銭でした。一円でも大金という時代でした。人で稼いだら、一円にもならないのに、馬で稼いだら、一日二円とか二円五〇銭の金になったから、馬の方がいいので、馬車追いをしたのです。

一番最初に馬でかせいだ頃は、親子轎を馬で引させる今でいうトレーラーのようなバチでした。夏になって初めて、金輪かなわの馬車を使用しました。その頃、農家でも楽な人は馬車だったですけど、ちょっと馬車なんかありませんでした。この間に鍛冶屋を始めた浅野幸道さんは、その功により勲五等を頂きました。資料館に大事にしまっておりある馬車は、浅野さんが造った馬車です。

一番の金儲けは馬車でした。馬車一台を買うのに一五円か一八円くらいでした。デメン賃が五〇〇円になった頃にはもう馬車が普及していたのです。その後は、護岸工事用の川の玉石あげを専門にしたのです。その

当時は、やっぱり二〇〇円か三〇〇円の馬の稼ぎでした。

昭和二二年に結婚した後も二年くらいは馬車の仕事をしていたのです。ですから、昭和二四年くらいまで馬車で仕事したことになります。その頃の女の人のデメン賃は一日一〇〇円くらいでした。それは山をやる前だから、昭和二五、六年頃でした。そのうち、馬車にタイヤがついた舗道車が開発され、それを旭川から五〇〇〇円くらいで買って来て舗道車で働きました。

その頃この地域では造林が盛んでしたから、昭和二八年に山を買って、造林業を始め二八年、二九年、三〇年頃はデメン賃が女の人一日が三〇〇円、男が四〇〇円から四五〇円でした。

朝の六時になると、山に出かけ燃料用の束薪たばまき作りを盛んにしたのです。この仕事は昭和三二年頃まで、ずっとやっていました。その後に木を切った山にあがって、植林をしていました。その功により今回、大日本山林

会賞に銀杯と時計を頂きました。

終戦後に、お金の切り替えがありました。あれは銀行にみんな預けたのか、その当時の金が一〇〇円札が大金だったのです。一円札を束にしてる時がありました。そういう時代でした。金の切り替えが終戦後の秋か次の年の春にまたがっていました。

その頃、こちらは志撫子で芋ばかり食べていて、遠軽に來たら米の飯を食べれるというので、親父についてきて、働いて食べれるようになって、終戦後にどこにしまつてあったのか、町の人が砂糖のきざらを背負って農家に来て、きざら一升と米一升をばくつていく時代でした。

きざらとは、赤砂糖の塊で、いわゆる「ざらめ」です。その頃白砂糖なんか、具合の悪いひとくらいしか食べれなかったのです。

それが終戦後すぐの秋の九月か一〇月の頃でした。砂糖とパインの缶詰でした。それも配給になったので

す。それまでは、見たことも食べたことはありませんでした。終戦後、パインの缶詰というのは初めて食べたのです。

ここに来た時には、山にいつて芋、南瓜でした。こは、昔は渡辺農場といつて三〇町歩で六戸分です。そこで高橋圭資さんけいすけという人がいて、その人が世話してくれて、うちのじいさんもあちこち歩く人で、それで水田やるならただで貸してやるからっていうんで、渡辺農場のここを借りてやりはじめたのです。

その当時で一町歩くらいでした。それで三年くらいやっているうちに、終戦になったのです。その時に土地を借りている人は、農地改革で自作農になりました。国のほうで地主から取り上げて、配分した時代がありました。

それで、その当時頂いた土地が三町三反歩でした。終戦前に一七年ぐらい馬を飼っていました。最初きた時には、鋤で耕していましたから、なんぼも面積がで

きなかったのです。

それからだんだん稼げるようになって、妹らも学校を終わって手伝えるようになって、手間も増えたし、それで三町三反の荒れ地を農地法でもらって、馬でみな拓いて、作物を作るようになりました。（奥さんに向かつて）お前と結婚した時には開いていたね。

水はけの悪い所は暗渠をしました。結婚をした昭和二二年には、二回目の暗渠をした時でした。一回目の昭和一九年頃には朝鮮人が来て、土管のかわりに柳かなんかを入れたものです。

土管暗渠を入れて、水はけがよくなりました。堆肥も入れて、それでビートもよく穫れました。終戦後は天気もよくて米がよくとれたのですが、五年に一回くらい皆無の年もありました。

戦時中にも一回凶作の年があつて、戦争で食べるものがない、凶作で米も穫れないので、苦労した時があつたんですよ。終戦後は米も穫れ、すべての作物が豊作

で、家庭もぐんぐん良くなっていました。

最初米を作って凶作になったのですが、ここはほとんど荒地で、また耕してから、土地を休ませたので、なにを作っても穫れたのです。芋を作っても南瓜作ってもです。耕地は水田が一町五反で、畑が一町五反くらいです。

それから米がいいから、別の土地を買って、新しく田圃を作りました。米作りをやめたのは、昭和四五年からでした。転作とか休耕をしました。政府の政策で、もう米はいらないといわれたのです。米を休ませたので四年か五年お金もらって、その頃にみんな水田やめてしまったのです。遠軽は四五、六年頃にみんなやめてしまったんです。

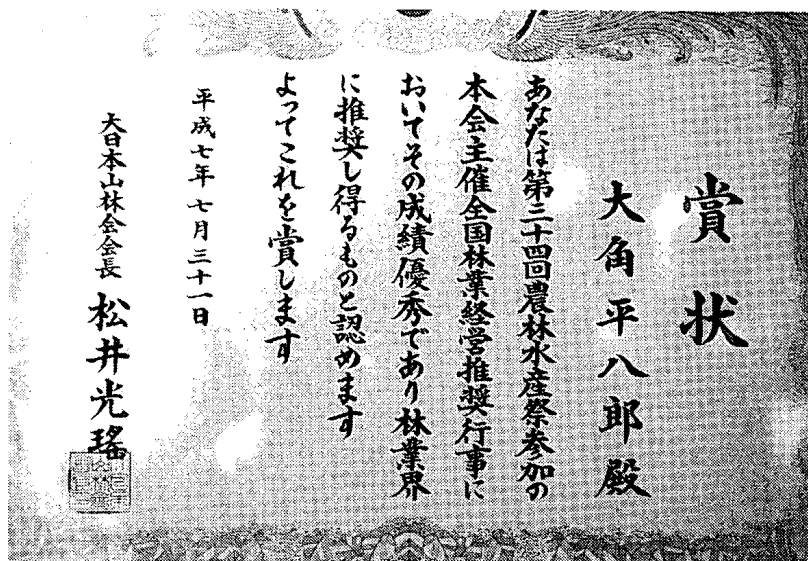
畑も田中角栄さんの日本列島改造論で宅地が変わってしまつて、町の融資で町の人家が家を建て始めたのです。土地のない人は土地を買えといつてね。まあ工場稼ぎの人が、自分もデメン稼ぎだったから、友達が沢

山おるから家のない人に、土地を分譲しました。この遠軽でいちばん最初に、この土地を分譲やり始めたのです。市街地化したのです。まだ一町歩くらいは残してあります。あとは当時みな売ったのです。

その金で、二〇何町歩くらいですか山を買ったのです。今は生田原、白滝、遠軽、湧別の四か町村にあります。山を買って木を切り薪にして文化薪といって売りました。その後はまた植林をしたんです。ガラマツとトドマツです。

今は手入れしただけでそのままです。古い木は昭和二八年の植林です。それで今は木を切ってもだめだといふので、一〇年くらい前から枝打ちをして、それで五〇年、一〇〇年くらいの木を育てようと思つています。

それが遠軽町では模範林ということになっています。他町村から山を見に来てものなんにもないのでないかといわれたら困るので、林業指導所の指導で、何ヶ所か



森林整備推進による大日本山林会からの表彰

車で行って山の木を枝打ちして手入れしてあります。そういう山が何ヶ所があるので、今回こういう賞を頂いたのです。

山をはじめてもう四二年になります。職業はもう何年か前から林業です。自然林の山も自分で植えたものばかりでなく、買ったものもあるし、それは白滝にあるのは、トド松の三〇センチもあるいい山です。今は木が安いし手入れだけして息子や孫の代にということですから。今は山に専念して夏になれば山へ手入れにいつているのです。

白滝では、山を買って立ち木を切って売ったら、どこかへ行ってしまうというのですが、その後に植えた石丸という人がなかなかの人で、林道の縁に種がこぼれて生えてきた、トド松、エゾ松、アカマツの小さい苗を山に持ってきて植えているのです。

うちで分けてもらった山は、トドばかりじゃないのです。トド松、アカ松、エゾ松、それが植えてあって、種類の違う木が混ざっているから、たいしい山なのです。

それを買った当時は植えて二〇年たったのや、植え

て五、六年のものを分けてもらいました。奥白滝の駅から北大雪のスキー場へいく途中なんです、ほとんど平らな山なんです。一〇町歩くらいあります。買ってから二五年くらいになるのです。

その当時、木の値段がよかったから、山の一部の良木とか悪い木とかを切ったりして売り、資金がなくなると、また手入れで木を切ったりして、生活費をどうにかまかなうことができました。山の木で生活ができたのです。

今は材木が安いから、それで生活はできませんが、当時は材木の値段が良かったのです。昭和二八年から山を始めたんですけど、山のゴミまで薪にして出した時代は金になりました。

結婚は昭和二二年でしたが、家内はキク子で、先祖は山形県出身です。子供は、長女の久子は昭和二三年に生まれましたから、もう今年で四七歳になります。その次が長男の隆則です。結婚して札幌で食べ物屋

をやっています。遠軽高校を出てから京都のホテルでコックの修行を一〇年間やって、札幌にきています。孫は学校が終わったら、遠軽にきて林業の跡継ぎをするといっています。親子の約束はそんなものです。それまでは私が管理しようといっています。

その下は敦子です。北海道女子短期大学を出て、今は小学校の先生です。もう高校受験の子どもがいます。

向遠軽の開拓とともに——菅井武夫・清氏の話

私の名前は、菅井清で大正一四年一月二日の生まれです。私は明治四二年六月二日生まれで武夫です。清の叔父に当たります。私の父親の専助が山形県東村山郡山辺町面白から明治三十一年に学田へ移住しました。信太さんが小作を募集し、学田にみんなで来たらしいのです。だから屯田として入ったわけではありません。何戸来たかは分かりませんが、山形県が中心です。秋

田県からとかいろいろな県から来ています。

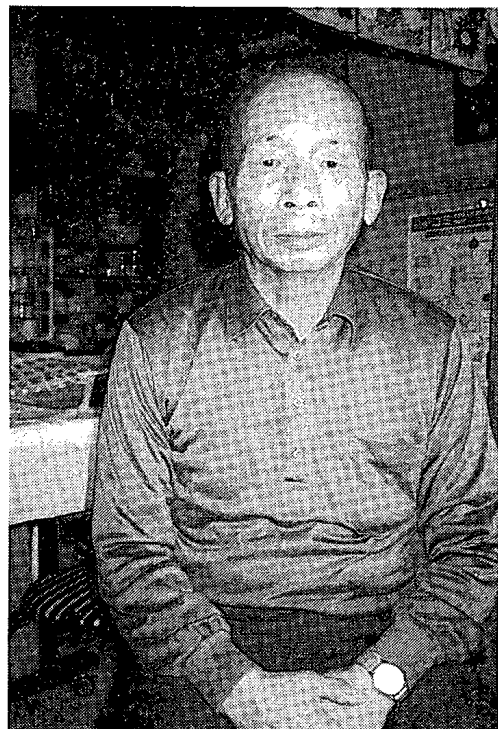
当時、学田に移住して来たのは、わが家では、ツメ、専助・ナツ夫婦、ヤス、そしてツメの子供の繁蔵です。ナツは専助を婿養子に迎えているのです。ツメの夫の勝蔵は来ていません。長女のはる江は、学田で明治三二年に生まれました。それに同三四年一月生まれの長男豊太郎、同三五年一月生まれの二男秀雄までは学田の生まれです。そして同三八年に向遠軽に再移住しています。

明治三十一年に学田に来て、本家のツメの家で働いていたのです。本家ではツメは子供の繁蔵とクサを連れて来ましたが、婿の勝蔵は来なかったのです。うちの親父の専助は四人兄弟で、その内一人は分家しましたが、専助は菅井家の婿養子となり、三男も四男も山形で婿養子に行きました。

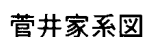
学田では、今、奥山喜作さんの分家が入っている土地を貰って家を建てたのです。学田には、野口芳太郎



菅井武夫氏



菅井 清氏



北海道への移住は、酒田港から出ました。二度と帰ることなんか考えられないから、友達全員が集まって別れの挨拶をして、弁当持ちで酒田港までは最上川を下ったようです。塩とか砂糖は必ず買わないといけな
いから、酒田で半日休んで酒田から船に乗って利尻島を廻って湧別港に上陸したのです。

昭和二年に、わたしが佐竹川向かいの生田原の畑を払い下げて貰って、四反歩くらい水田を拓き、北見赤毛という品種を無断で作ったのです。当時土地は、明治三八年にここ向遠軽に来てすぐ拓いたのですが、



開拓着手小屋（明治38年）

昔五町歩といったら一五〇間四方だから、その坂の上には杭があったのですが、向こうの隣の高橋惣作と分けたのです。土地を貰っても拓かないと、没収されてしまいます。

最初は道からの払い下げを受けた土地は五町歩ですが、あとで佐竹川の向こうに荒れ地あったので、悪い土地なんだけど拓いたと親は言っていました。川向こうには家が四七軒あり、こっちには五三軒あったそうです。

川のこっちには、今でも藁葺小屋がありますが、寂しいところなので、川の近くに家を建てたのです。最初は奥山さんのじいさんが払い下げを受けて入ったけど、寂しいからうちを呼んだのです。

うちでは最初に、三女ヤス、夫の大江長治と、その息子が入ったのですが、ヤスの夫の長治が寂しいものだから、二女のナツと専助を呼んだということです。それが本当らしいのです。



大正2年に建てた家

大正二年頃の写真があるけど、鬱蒼たる森林であつたようです。ご覧のように写真に小さい小屋がありますが、私はこの着手小屋で生まれているのです。それでこの大正二年の写真を焼き増ししてもらったんです。

大正二年にこれだけの家を建てたのは、立派でしょう。芭露^{ばろ}に峯田という私の小作していた人がいたのですが、その人が来て言うには、明治三八年にここに入つて、大正二年にここにこんな立派な建物を建てるなんて考えられないということでした。その言葉を思い出すのです。

うちでは昔ハツカの契約小作して七円か八円もらつて、一七、八円になっていたのですが、会社が金を支払わないので、裁判沙汰になったことがありました。その頃、ハツカがどんと穫れて、それで得たお金に足して土台付きの家を建てたのです。

お金をたくさん得た人の中には、金貸しにみんなとられたり、倒された人もいたのです。私のところでは



ハッカの刈り取り作業

この家と、隣の家を建てたそうです。この時に建てたこの物置だけは今も残っているのです。

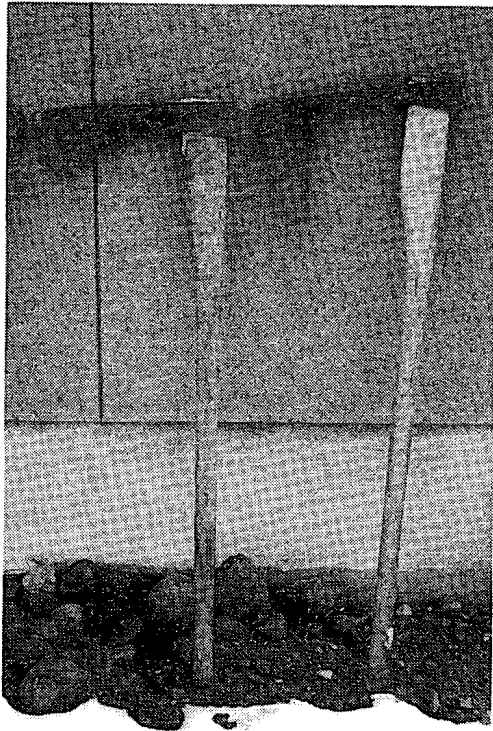
ヤチダモの工場なんかないから、ヤチダモの木を削って、カンナを掛けて合掌造りにしているのです。カンは今と同じものです。ちよんとか、はびろは、土台造りに使っていました。はびろというのは、大工が使うまさかりみたいなので大きいです。柱を削るのは、それでないとは削れなかったのです。

それから、さつてというのがありました。まさかりみたいに大きなのがあったのですが、それで大削りして、そしてさつてきれいにするのです。それに、ちよんなどといって曲がったのがあるでしょう。あれでけずったらしいのです。

新築祝いをした時の写真がありました。それは資料館に寄付したのです。こんなに木がありました。私（武夫）は、ここから木をもらって昭和十一年に分家したのです。

私の父は木を倒したら邪魔になるから、枝をおろして木を切ったのです。木を倒したらふられるから、おっかなかったのです。山形の鋸はあまり大きくないので、それで枝をおろして開いたのです。

本家からは二町五反歩くらいの土地をもらって分家したのです。実際には土手がかかっているから二町歩もないのです。その当時は、ハツカだから牛なんかの分与はありませんでした。



柱を作るための「はびろ」など

私が農協の役員した頃には、遠軽は一人平均三町歩くらいの所有でした。上湧別もそうですから、それで暮らしてました。それに牛が入ってからは、土地がなんばあっても足りなくなりました。

私が分家した時に二町五反歩くらいもらって、その後、一、二、三回にわたって土地を買っているのです。私が六回に息子が六回くらいです。

今は、息子がやってるから分かりませんが、あっちこっちにあるから三〇町歩くらいあります。主体が酪農だから、主に牧草を植えているのです。

こちらに入った頃は、山だらけで松はありませんでしたが、檜、イタヤ、ガンピの木（白樺の木）、しころ、ヤチダモなどがありました。それを倒して、運ぶのに大変で始末に困るから焼いたのです。そこで遊んでいて木の下敷きになって死んだ人もいます。

そういう木を切り開いて、最初植えたものはハツカ

でした。学田にいた頃から、ハッカとか芋を植えました。芋は食糧で、ハッカは換金作物でした。食糧には芋のほかには小麦や稲黍があります。蕎麦は、荒山を拓いた頃に遅くていいから作つたらしい。蕎麦を作ると土地がやせるから、そのかわり木が大きくなるのです。大根とかもそうです。それで、柏とか檜とかのあるところは土地が良いので、川の向こうが拓けない時にはこっちが拓けたのです。向こうは湿地だったから、わしら学校へ行く頃までは拓けていませんでしたが、昭和元年に田圃が出来てから拓けたのです。

後は、オンコの木なんかもたくさんありました。小屋の柱なんかもオンコを使っています。今もこちらの川のふちにあるのです。向こうは林だったのです。この家のこの太い柱は山ぎわから持ってきたオンコです。換金作物としてのハッカは、終戦後まで作っていたのです。豆類も大手亡や小手亡をなんぼか作っていました。値段が安くなって始末が悪くなって、牛に喰わ

したこともあります。

大正の終わりから昭和の始めのことですが、ハッカは換金作物の主体でした。岡山県の長岡商事とか仲買人がたくさん入っていたように思います。相場もんだから、その時に応じて値段が違うのです。値段が下がって、土地を売ったりしてカマドをかやした家が何軒かありました。

ハッカは種子を一度蒔けば、ずっと生えてくるのです。種をまく必要がないのです。秋起こしをすれば根が残っているので、次の年になると芽が出るのです。ただ鎌で刈るだけです。九月に収穫して小屋で乾燥させ、陰干しをして吊します。そして一〇月頃に蒸留をします。

その方法は、大きなニシン釜の上にせいろを乗せ、その当時は薪はいくらでもあるから、薪を燃やして蒸すのです。その蒸気を冷却すると、水と油が流れてくるのです。それを分水器にかけると、油は軽いから取



乳牛の飼育風景

れるのです。

そんなに難しい技術はいらないのです。それでも、その頃は共同利用のため忙しいから、夜通しやらないとだめだから、それが大変でした。各家庭に蒸留施設があつたわけではないから、ない人はあるところについてお願いして蒸留するのです。

そういう生活は、移住後ずっとです。学田も向遠軽もハッカで拓けたのです。豊里の部落は田圃になつてから拓けたのです。うちは途中で牛も飼いましたから、家畜の飼料として牛にも食べさせました。

乳牛は、古いんです。私ら働かない前からいたので。私が大正一四年の生まれですから、それより前から牛を飼っていました。あれはナツばあさんが亡くなったのが大正八年ですから、その頃から乳牛を飼っていたのです。

ここに私が生きていて、あとはみんな亡くなっているから、私が生き証人です。この年は、畑も田圃も大

豊作で、米を一〇〇俵くらい獲りました。しかし、九年と一〇年は穫れなくて、一一年は米を貰って食べました。

私の母親ナツは、心臓とか腎臓とかが弱かったのです。それで栄養をとるのに、牛の乳が良いというので飼いはじめたのです。それで私が学校時代に三澤恒助さんが親牛を買って来たのです。最初は、そこから乳をもらってきて、おいしいもんだなといって飲んでいました。それで乳牛を飼ったのが始まりでした。その前に牛を飼っていた人は搾乳牛でなくて、肉牛でした。

肉牛はエア―シャーです。エア―シャーはホルスタイン系だから乳牛です。始めは、あそこから、ここからというように買って来たのです。それがエア―シャーだから、乳が濃いかからおいしいといって、搾乳で飼ったのはうちが一番早かったのです。

その前に寒河江さんとか佐竹さんが飼っていますが、牧場へ下げるのに沢山の牛を放してやらないといけな

いから、牛を増やし、そして信太さんの土地「戸分（五町歩）」とばくったという話が町史にも載っています。佐竹さんもこの山に下げるのに、あそこの奥に一〇頭くらい牛を放したのです。

佐竹川の名は、佐竹さんが一番最初に入ったから、付ける名前がないから付けたのでしょう。これは堤防用地ではないのです。それで、どこかで詰まれば、どこかに流れていたのです。だから、川はもともとなかったようです。当時の地図にも川らしいものはないのです。土地を開墾するのに問題になったようです。

それで、ハツカは終戦後までやっていました。飛行機の油とかに必要でした。その頃は、すでに私らは牛飼いだから、石油なんかはよけいに配給が当たったのです。それでハツカは粘着材に使うのか、それで配給がよけいあたるから、あまりひもじい思いはしなかったね。

直径八尺高さ二〇尺のねりこみのサイロを森永の副

工場長の福島という人から作るように勧められ、いつできるもんだかと思っていました。うちは牛二頭くらいしかないし、他の家にはいたけど、それで向かいにサイロを一〇軒分作ったのです。それが一〇〇円で出来上がったのです。

それで、社名^{しゃなまち}渕の人に補助を余計にやって、私たちは型枠を使って、そしてひと夏に一〇軒分を作ったのです。昭和一四年の話です。こんなに沢山の牛を飼うとは、その頃は思いませんでした。

昔、福田牧場に初めて牛が入ったのですが、そこに奉公人をしていた奥山さんに牛をどれくらい飼っていたんだと聞いたら、二〇頭くらいかなと言っていました。それが大きい牧場でしたから、家庭学校も、種付けをするのに、私らは福田牧場とか家庭学校へ牛を引っ張って行きました。

それから牛をだんだんに増やしていきました。今は、私（清）は七〇か八〇頭くらいです。私（武夫）も同

じくらいです。こちら辺はみな同じくらいです。じゃ、こちら辺はみな牛飼いかというと、そういうわけでないけど、酪農家も減ってきています。

向遠軽は、割と面積が広いんです。遠軽橋があって、あそこからこっちは、私ら若いころは、みな向遠軽とあったんです。戸数は一〇戸くらいで、坂本秀夫、松田利美、うちと、ここと、佐竹二郎、大江七郎、福田純一の各家々です。

出身県は山形が多いのですが、山形出身は佐竹和利、松田正二郎、大江稔、菅井清、菅井武夫、福田純一の六軒です。坂本正雄は福島県です。松田寛、堂前正雄は後から来た人だから分かりません。野中貢は分かりません。東海林国夫もいました。あの人は終戦前は私らと一緒にやっていたから山形県でしょうか。

東海林さんは、ここでも有名な牛飼いなんです。東海林牧場は有名で、馬も五〇〇頭くらいいるんじゃないですか。不動産は息子にやらせています。駅でタク

シーに乗って東海林牧場といったら連れていきます。それだけ幅をきかせています。

終戦後から幅をきかせたのです。兄貴は沖縄で戦死しているから。その奥さんと一緒になって牧場を始めたのです。それがやり手でね。兄貴は武夫といって、沖縄で戦死したのです。全国でも有名な牛飼いです。今牛が不景気だから馬を飼っているのです。

馬も食肉用です。九州まで輸送しているのです。九州へ行ったら馬刺しが有名ですが、わたしらは馬を飼っていたからあまり食べませんが、こんなにちっちゃくて八〇〇円とかするのです。今は子供の代になっています。

清の妻はカツエで、子供は、長女が敏子、長男が誠、二男が謙司、次女が智子の男二人と、女二人です。長女は今、遠藤というところに嫁いでいます。長男が家を継いでいます。嫁が京子で、子供が三人います。長男が和之、二男は浩治、三男が敦士です。高校生と中

学生です。

昔の食べ物ですけど、学校へいけば、市街の人は米の弁当だから、わたしらは麦の飯だから、恥ずかしくて持っていけなかったのです。それで、昼に帰ってきたら、母親が麦に味噌をつけて握ってくれました。

米の飯より美味かったのです。米を作ったのは昭和二年からだからです。よく、麦、稲黍と米と食べさせてもらいました。美味かったのです。また、私らが学校へ通っていた昭和八年に火事で家が焼けました。

小学校は学田の下で遠軽小学校です。私らの時は一五〇〇人くらいの生徒がいました。昔の遠軽小学校の板やなんかは、うちの親父らが木挽きをして作ったのです。

昔の建物で、燃料も今とは違っていましたから、大きなストーブで薪を燃やすけど、回りの人しか温かくなく、寒くなったなら代わる代わるそこに行って当たってもらいました。

本家の菅井専助が、大正一二年の経営品評会で一等賞になりました。この資料を内地の実家に送っていたので、甥っここらもらってきたのです。全部で一五人おったのです。ここの管内です。そこでうちの一等賞だったのです。芭露の越智さんとか、上湧別の岡村さんとか、あとは斜里の人でした。経営で管内一だったのです。大正二年でした。私が学校を卒業する頃でした。

〔付記〕

平成七年二月二日に、大角平八郎氏から生活史を聞き取り、あれから二年間が経過した昨年、本誌に収録しようと思い立ち、原稿を整理して確認のため送稿したときには、同氏は平成九年二月に逝去されていた。

北海道二二市町村史の多くは行政史中心の記述が目立ち、各時代を生きた個々人の視点からの生活史はあまり記述されていない。このことから、私はその収録に努めてきた。北海道の過去の生活文化は、それを知る人々の逝去によって、記録されないままこの地球上から消え失せようとしている。ここに大角氏の生活史を記録し得たことはせめてもの幸せであった。記して同氏のご冥福を祈りたい。

ここに「個人の生活史からみた遠軽町」を収録するにあたって、遠軽町に臨場感がない私の原稿を、本人ならびに細川紀久夫農政林務課長に目を通してもらい加筆訂正を願った。調査から原稿完成まで、ご協力をいただいた各位に感謝申し上げます。

●協力団体／遠軽町（北川健司町長、細川紀久夫農政林務課長、笹原英視農政林務課技師）

●協力者／三沢学、小林誠、岸ハルエ、大角平八郎、菅井武夫・菅井清

●参考文献／『遠軽町史』（昭和三三年七月）、『学田八〇年』（昭和五五年四月）